

公演名：ドイツ・マンハイム音大総長ルドルフ・マイスター教授公開レッスン

日時：2018年8/23(木)、8/24(金)

会場：赤坂ベヒシュタイン・サロン

小出郷文化会館の音楽合宿と並んで夏の恒例行事となっているルドルフ・マイスター教授の公開レッスンが今年も開催され、一日目の公開レッスンの様子を見学させていただきました。

シューベルトの〈さすらい人幻想曲〉では、受講生が曲を通した後、冒頭のテーマの部分（譜例1）について何度もマイスター先生が手本を示され、曲の背景などについてお話しされているうちに一時間があっという間に経ちました。曲目のタイトルのさすらい人とは、あてもなくさまよう人、という意味もありますが、ここでは中世ヨーロッパにおいて、若人が将来の仕事のために自分探しの旅をし、親方のもとへ修行しに行くという様子を表現しているそうです。冒頭の力強いテーマは、マイスター先生が弾き出すとファンファーレのようにピアノ全体が豊かに鳴り出し、今まさにさすらいの旅へ出かける若者を表すかのようにエネルギーで澁刺としたものでした。また、転調していく様子は旅の場面が目の前に浮かんでくるようで、次はどこに行くのか、はらはらしていたり、ホッとしたりなど、さすらい人の心情や旅の様子を生き生きと描写されていました。受講生の方もそれに触発されてか、ただ **ff**、アクセント、など演奏するだけでなく、音がだんだんと開放され表現が豊かになっていく様子がとても印象的でした。

譜例1. シューベルト：〈さすらい人幻想曲〉 D760 より

The image shows a musical score for Schubert's 'Fantasy for the Wanderer' (D760), Example 1. The score is in common time (C) and marked 'Allegro con fuoco ma non troppo' and 'ff'. It shows the first system of the piece, featuring a strong, rhythmic melody in the right hand and a supporting bass line in the left hand. The notation includes various fingerings and accents.

バッハの平均律二巻第1番（譜例2）では、「曲のダイナミクスについては、楽譜には何も書かれていないけど、あなたはどう考えていますか。」とマイスター先生は受講生に問いかけられ、「当時の楽器（チェンバロやオルガン）の音で演奏しているように弾くべきだという人もいるけれど、自分はそうは思わない。現代のピアノで弾くなら全く別のものとして今のピアノを生かした表現をすれば良いですよ。」と一例を弾いてみていただきました。楽譜には書かれていないけれども、様々な楽器での **p** や **f** を想起させるようにコントラストをつけ、四声体のポリフォニックで複雑なバッハの曲を、各声部が異なる音色でくっきりと浮かび上がって聞こえてきました。ここで、音域ごとに音色が異なるという特徴をもったベヒシュタインのピアノでバッハを弾くことの優位性を感じました。「自分が弾いたのはあくまでも一例で、同じようにあなたが弾かなければいけないということでは全くなく、あらゆる瞬間の響きを感じて自由に表現して良いのです。」ということを強調されていました。

譜例2. バッハ：平均律第2巻 第1番 プレリユード より

ラフマニノフの練習曲 Op.39-1（譜例3）では「多くの人が左手を強調しすぎるけれど、これはヴィルトゥオジティーを見せる曲だから、大変だけれども右手の動きを単なるハーモニーとしてぼかして弾かずに、うねりをしっかりと表現しましょう。そうしないとラフマニノフらしさが出てきません。同時に左手の声部は、レガートでチェロのような音色で表現しましょう。右と左が同じ音色にならないように！」と指導され、受講生の演奏もより立体的になっていきました。

譜例3. ラフマニノフ：絵画的練習曲 作品39-1 より

作品ごとに、各時代の様式を踏まえ、現代のピアノ、更に言えばベヒシュタインのピアノで表現できる最大限のことを生かしたレッスンをなされ、非常に熱のこもった時間でした。

（文責：前田）